

和泉流二十世宗家

和泉元彌の

狂言らびふ

Produced by
PAC
Performing Arts and Culture

出演：和泉元彌
和泉流宗家一門

パフォーマンス アーツ アンド カルチャー
Performing Arts and Culture

優れた舞台芸術を
皆様にお届け致します。

舞台芸術全般の経験と実績を有し、様々なニーズに対応できる芸術文化団体として、2020年に一般社団法人PACは設立されました。

舞台機材レンタル・運搬・舞台マネジメント・各種制作業務のほか、各種教育機関の芸術鑑賞会等の行事をはじめ、自治体や公立文化施設の自主事業、イベント企画運営、オリジナル（市民参加型演劇・伝統芸能など）企画・制作業務も行い、ジャンルを超えて優れた舞台芸術作品を皆様にお届けいたします。



リーディングミュージカル
「ロミオとジュリエット」



コメディミュージカル
「真夏の夜の夢」



ミュージカル
「夢果てるとも」



和泉元彌
狂言らびふ



ヒタノ緒ー
スーパーリズムミックス



オリエンタリズム
「守城」



アンデスの音楽
「大地の讃歌」

お問合せ 一般 **PAC** TEL 03-3929-1555 FAX 03-5539-4136
お申込み 社団法人 PAC 〒177-0045 東京都練馬区石神井台8-19-22-505 E-mail: mail@pac-stage.com

プログラム

公演時間：1時間20分(休憩を含む)

【Aプログラム】

- ①狂言のお話
- ②鬼瓦(20分) 出演者2名
— 休憩 10分 —
- ③盆山(15分) 出演者2名
- ④和泉元彌氏によるトーク&ワークショップ

【Bプログラム】

- ①狂言のお話
- ②仏師(25分) 出演者2名
— 休憩 10分 —
- ③盆山(15分) 出演者2名
- ④和泉元彌氏によるトーク&ワークショップ



鬼瓦 久しく在京の大名が帰郷するにあたって、因幡屋の楽師如来へ参詣する途中、鬼瓦を見て国元の妻を思い出す。



盆山 盆山の藩に隠れた盗人は、その家の主人から、犬だ、猿だとかかわれ、最後には鯛だと言われ、飛び跳ねながら逃げる。



仏師 仏像を求めて都に上がった田舎者に、仏師と称してすっぱが近づき、前金を取ってから、自分が仏師になりすましますが…。

日本室町化計画

日本人らしさは、時代によって変わるかもしれませんが、いつの時代にも通じる日本人らしさはあるのではないかと私は思っています。例えば、豊かに与えられた日本の四季の中で、日本人の感性は育ててきました。一見この季節感からほど遠いように思える笑いのセンス、実は日本の自然観や季節感から生まれてきています。狂言を演じているとそれがよくわかるのです。日本人はもっともこの感性豊かに笑っているのです。狂言は笑いの芸能です。狂言を観れば、昔の日本がわかりますし、日本人の感性がわかります。

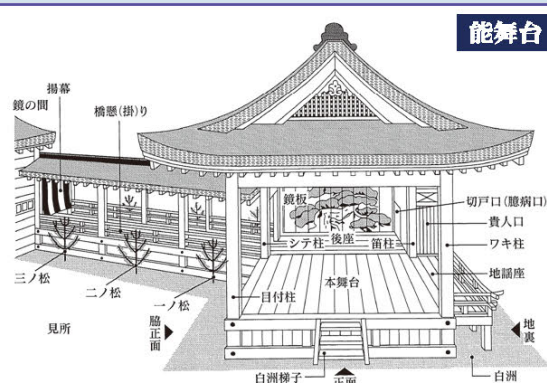
狂言の生まれた室町時代の人々は、現代の私たち以上に「暮らしを楽しんでいました。たとえば歌を詠むこともそのひとつです。歌を詠んだ経験のある方ならばわかると思いますが、歌を詠もうとすると、急に自然が身近に感じてるから不思議です。歌を詠み、器を詠み、舞を舞う。能舞台が野外にあったことも、自然をみんな楽しんでた証です。歌を詠んだり、舞を舞ったりが現代の日本の常識のようにならば、狂言の舞台もぐんと身近に感じていただけるはずです。若者がさらにこの器を詠んだりしたら、どんなにかついでにうらやまします。でも、何も歌を詠まなくても狂言を観ていただければ、日本人がもともと持っている感性を感じて頂けます。

古典芸能と言えど、難しくなく、あぐま、楽しく、狂言の舞台が広まってもいいように、「日本室町化計画」と名付けました。この室町時代の感覚や感性を狂言を通して、笑いとともに皆様へ伝えていこうと考えています。



狂言らしいぶ

狂言は、室町時代の日常語による会話劇。その室町口語は現代日本語の基礎と言われています。だから時代を超えてわかる！笑える！



狂言を楽しんで頂くとき、能楽堂の仕組みを知っていたら、興味がひと味違います。現在は、簡易舞台の設置も可能なので、体育館等のスペースを活用した公演も可能です。



十世・三宅藤九郎

「観望」の小猿役で初舞台。その後、先代9世三宅藤九郎の指名により、10世三宅藤九郎の名跡を継承する。また、和泉淳子とともに女性狂言師としての活躍が認められ文部大臣より感謝状を授けらる。

また、ロンドン・グロブ座において「狂言とシークスピア」について、英語でワークショップを行なうなど海外での狂言普及に尽力し、近年は、狂言の伝承普及とともに小中学生の「こころの教育」に努めるなど、多方面で精力的な活動を展開している。



和泉淳子(日本初女性狂言師)

3歳で「観望」の小猿役で初舞台。その後9歳で狂言最高の格式を持つ「三番盛」を演じるなど、大曲・秘曲・稀曲を異例の若さで次々に演じた狂言界の若き一ツ。



和泉元彌(和泉藩 千世宗家)

24歳で、先代19世宗家故和泉元秀(重要無形文化財保持者)より、和泉流宗家のみに許される一子相伝の芸を継承。以後、映画出演をはじめ、司会者や俳優として活躍の場は多岐にわたる。狂言の世界にとどまらず多くの分野からも注目される。「自分を通じて狂言に興味を持ってもらえれば幸せ」という姿勢のどおり、彼を通じて狂言を知った人も少なくありません。

近年においては、狂言が身近にある芸能になるよう、毎月の自主公演(和泉会 渋谷狂言ライブ)などと共に、全国の自治体主催の公演、学校公演を主軸に活動し、また伊勢神宮を初めとする、奉納狂言も精力的に行なっている。

今、私たちが演じているこの舞台を600年前の日本人が観ていたと想像するだけでワクワクします。このワクワクドキドキ感を一人でも多くの方々に感じて頂けたらと思います。